第64回
大阪母性衛生学会学術集会

会　　長：橘　大介（大阪公立大学大学院医学研究科　女性生涯医学　教授）

学術集会長：玉上　麻美（大阪公立大学大学院看護学研究科　先進ケア科学領域・ウィメンズヘルスケア科学　教授）

日　時：2025年12月21日（日）9時30分　～　17時　※ 9時より受付開始

会　場：大阪市阿倍野区旭町1－4－3　大阪公立大学医学部　学舎4階　大講義室

テーマ：**「妊婦・家族の意思決定への支援**
～遺伝学的検査・ゲノム診療を受ける妊婦とその家族への支援を考える～」

＜ 研修会　9:35～12:05 ＞

座　長：玉上　麻美先生（大阪公立大学大学院看護学研究科　先進ケア科学領域・ウィメンズヘルスケア科学　教授）

講演①：「周産期領域の遺伝学的検査・ゲノム診療と最近の話題」
瀬戸　俊之　先生（大阪公立大学大学院医学研究科臨床遺伝学・病院教授
大阪公立大学医学部附属病院ゲノム医療センター・副センター長）

講演②：「拡大新生児マススクリーニングにおける遺伝カウンセリングと多職種連携の必要性」
酒井　恵利　先生（大阪公立大学医学部附属病院ゲノム医療センター・認定遺伝カウンセラー）

◆ 日本産科婦人科学会（日本専門医機構【2単位】）、日本産婦人科医会研修の単位を付与します。
ご参加の医師各位は各会の「会員証QRコード」をご準備ください。
◆「妊婦・家族の意思決定への支援」では、CLoCMiP®（助産実践能力習熟段階；クリニカルダラー）レベルⅢ認証申請要件の必須研修WHC指定項目「意思決定支援」の研修終了証を配布します。

＜ ランチョンセミナー　12:25～13:25 ＞

座　長：三枚　卓也　先生（大阪公立大学大学院医学研究科　女性生涯医学　准教授）
演　題：「女性ホルモンの変化が皮膚と毛髪に与える影響」
演　者：今西　久幹　先生（大阪公立大学大学院医学研究科皮膚病態学　准教授）
後　援：大塚製薬株式会社ニュートラシューティカルズ事業部

＜ 総　会　13:35～13:45 ＞

三枚　卓也　先生

＜ 学術集会　13:45～16:25 ＞

参加費：一般　5,000円（内訳：参加費4,000円＋年会費1,000円）
学生　2,500円（内訳：参加費2,000円＋年会費500円）　※学生証を受付にて提示
大阪産婦人科医会会員　4,000円（参加費4,000円・年会費徴収済）
お支払いは現金のみです。その他の決済はいたしかねます。

後援：大阪産婦人科医会/大阪府看護協会/大阪府助産師会/OGCS看護師・助産師会

Time Schedule

	時　間	内　容（演者および進行）
オリエンテーション	9:20 ～ 9:30	
学術集会長挨拶	9:30 ～ 9:35	玉上　麻美　先生
研修会	9:35 ～ 11:05	講演 1　瀬戸　俊之　先生
	11:05 ～ 11:15	休憩（10 分間）
	11:15 ～ 11:45	講演 2　酒井　恵利　先生
	11:45 ～ 12:05	質疑応答･まとめ
ランチョンセミナー	12:25 ～ 13:25	今西　久幹　先生
総　会	13:35 ～ 13:45	三枚　卓也　先生
学術集会 （演題数：17）	13:45 ～ 14:35	第 1 群【6 題】
	14:35 ～ 14:45	休憩（10 分間）
	14:45 ～ 15:25	第 2 群【5 題】
	15:25 ～ 15:35	休憩（10 分間）
	15:35 ～ 16:25	第 3 群【6 題】
授賞式	16:25 ～ 16:45	第 63 回学術奨励賞･ 竹村喬記念奨励賞　演題発表
閉会挨拶	16:45 ～ 16:50	①学術集会長 ②次年度学術集会長

企 業 展 示

アメジスト大衛株式会社

キヤノンメディカルシステムズ株式会社

広 告 協 賛

株式会社 明治

研修会

テーマ：「妊婦・家族の意思決定への支援
～遺伝学的検査・ゲノム診療を受ける妊婦とその家族への支援を考える～」

座 長：玉上　麻美 先生（大阪公立大学大学院看護学研究科　先進ケア科学領域・
ウィメンズヘルスケア科学　教授）

講演 1 「周産期領域の遺伝学的検査・ゲノム診療と最近の話題」

9：35 ～ 11：05

瀬戸　俊之 先生（大阪公立大学大学院医学研究科臨床遺伝学・病院教授
大阪公立大学医学部附属病院ゲノム医療センター・副センター長）

抄録：
近年の遺伝医学の発展はめざましく、ゲノム医療の重要性が高まっている。本学では長年、多診療科での遺伝カンファレンスを重ねてきたが、2016 年に遺伝診療センター（2019 年にゲノム医療センターに格上げ）、2020 年にはゲノム診療科が立ち上がり全領域の患者に対応している。周産期領域との関わり例を挙げる。

1) 希少疾患、難病のゲノム診療：基礎疾患を有している女性の遺伝学的診断、遺伝カウンセリングを行う。妊娠・出産時の合併症について情報提供を行う。必要に応じて産科医に情報提供を行う。
2) 挙児希望のあるカップルへの遺伝カウンセリング:何らかの基礎疾患を有しているカップルが挙児を希望する場合、子に基礎疾患が継承される確率を情報提供する。
3) 血縁者が遺伝性疾患と診断されている場合の遺伝カウンセリング:妊婦や挙児希望のカップルに対しご本人の罹患リスクや子への遺伝性、診断に関する情報提供を行う。
4) 非侵襲性出生前遺伝学的検査（NIPT）の遺伝カウンセリング：NIPT 認証施設として 21 トリソミーをはじめとする染色体異常症の自然歴について正確な情報提供を行う。
5) 出生前胎児遺伝学的検査（出生前診断、NIPT 以外）・着床前胎児遺伝学的検査（着床前診断）に関する情報提供、遺伝カウンセリング：発端者の遺伝学的診断とともに、カップルが自律的な意思決定ができるよう支援する。
6) 新生児マススクリーニング（NBS）：治療可能な疾患を対象に生後 4－6 日の新生児に対して行われれる。近年は新規治療法が可能となった疾患を加える拡大 NBS が広がっている。遺伝カウンセリングが必要といわれており、現状では課題も少なくない。

妊娠・出産という女性の限られた時期のみならず、ゲノム医療においては上記のように男性も巻き込んだ家族、血縁者に長く影響する問題として対応している。助産師・看護師や保健師などの方々の果たせる役割は大きいと実感しており、当日はその点も紹介したい。

1993 年　大阪市立大学医学部卒業
1995 年　大阪市立大学大学院医学研究科修了（医学博士）
2011 年　大阪市立大学大学院医学研究科発達小児医学講師
2018 年　同　准教授
2019 年　大阪市立大学大学院医学研究科臨床遺伝学准教授
2020 年　同医学部附属病院ゲノム医療センター副センター長、ゲノム診療科副部長
2022 年　大阪公立大学大学院医学研究科臨床遺伝学病院教授
現在に至る

講演 2「拡大新生児マススクリーニングにおける遺伝カウンセリングと多職種連携の必要性」

11：15 ～ 11：45

酒井　恵利 先生（大阪公立大学医学部附属病院ゲノム医療センター・認定遺伝カウンセラー）

抄録：

遺伝の悩みはまさに人の数だけ存在し、病歴、家族構成、ライフステージや個人の価値観によって様々である。遺伝カウンセリングとは、「疾患の遺伝学的関与について、その医学的影響、心理学的影響、および家族への影響を人々が理解し適応していくことを助けるプロセス」と定義される。臨床遺伝専門医と認定遺伝カウンセラーが協働し、クライエントの思いを傾聴しながら情報提供と心理社会的支援を提供する。

新生児マススクリーニングで診断される疾患の多くは遺伝性疾患であり、特定の遺伝子の変化が発症の原因となる。両親にとって、”要精査”という結果は想定外の出来事であることが多く、結果を待つ間の不安や将来の心配など、様々な葛藤を経験することが少なくない。近年では、早期診断・治療が可能な疾患が増え、施設・自治体レベルで実施される拡大新生児マススクリーニングが実施されている。重症複合免疫不全症や脊髄性筋萎縮症、ライソゾーム病などが対象に加わり、従来の対象疾患とは異なり、X 連鎖性疾患が対象に含まれることから家系診断につながる可能性がある。また、現時点で病的意義が不明なバリアントが検出された場合、診断の確定が困難となることもある。これらにより両親が直面する課題はますます複雑化している。このような状況を踏まえ、診断・治療を担う小児科医と臨床遺伝専門医や認定遺伝カウンセラーの連携体制の強化が求められる。また、要精査と告げられた両親の心理的衝撃をできるだけ軽減するためには、あらかじめ一定の心づもりを持てるようにしておくことが望ましい。そのために、妊娠中から検査目的や疾患概要について十分な理解を得ることは重要であり、一次的な説明を担う産婦人科医や助産師などとの連携も欠かせない。多職種・多診療科による連携体制の整備が今後の課題として挙げられる。

2020 年　関西学院大学理工学部生命科学科　卒業
2022 年　京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻遺伝カウンセラーコース　修了
2022 年　大阪公立大学医学部附属病院ゲノム医療センター　認定遺伝カウンセラー

ランチョンセミナー

ランチョンセミナー

座　長：大阪公立大学大学院　医学研究科　女性生涯医学　准教授　三枚　卓也　先生
演　者：大阪公立大学大学院　医学研究科　皮膚病態学　准教授　今西　久幹　先生
後　援：大塚製薬株式会社ニュートラシューティカルズ事業部

演　題『女性ホルモンの変化が皮膚と毛髪に与える影響』　12：25 ～ 13：25

今西　久幹 先生（大阪公立大学大学院 医学研究科 皮膚病態学 准教授）

抄録：
女性ホルモンには、卵巣から分泌されるエストロゲンやプロゲステロンなどがある。エストロゲンは、乳房や子宮の発育に関与し、女性らしい体型を作る。皮膚では、コラーゲンの産生を促すことで肌の弾力やハリ感の維持に貢献し、毛髪の成長期を延長する。一方、プロゲステロンは、基礎体温を上げ、受精卵が着床しやすいように子宮内膜を安定させて妊娠を維持する。皮脂を増やす働きもあるので、肌の保湿や毛髪のツヤ感に関わる。月経周期やライフステージによって、これらの女性ホルモン分泌量は変化し、毛髪や皮膚に影響を与える。特に妊娠・出産に伴う急激なホルモン分泌量の変化では、休止期脱毛症などの脱毛症を引き起こすことがある。本講演では、以上のような女性ホルモンの変化が皮膚や毛髪に与える影響を概説するとともに、心がけたいライフスタイルやエストロゲン様作用をもつエクオールの特徴・効果についても紹介する。

2002 年	近畿大学医学部卒業
2003 年～2005 年	大阪市立大学大学院医学研究科皮膚病態学　臨床研修医
2005 年～2006 年	大阪市立大学大学院医学研究科皮膚病態学　前期臨床研究医
2006 年～2010 年	大阪市立大学大学院医学研究科博士課程
2010 年～2011 年	大阪府済生会富田林病院皮膚科副医長
2011 年～2013 年	大阪市立大学大学院医学研究科皮膚病態学　後期研究医
2013 年～2015 年	The University of Manchester, UK The Center for Dermatology Research, Institute of Inflammation and Repair　客員研究員
2015 年～2017 年	大阪市立大学大学院医学研究科皮膚病態学　講師
2017 年～2019 年	医療法人藤井会　大東中央病院皮膚科　部長
2019 年～2022 年	大阪市立大学大学院医学研究科皮膚病態学　講師 大阪公立大学大学院医学研究科皮膚病態学　講師
2022 年	大阪公立大学大学院医学研究科皮膚病態学　准教授

- 専門医・認定医：日本皮膚科学会認定皮膚科専門医、日本アレルギー学会専門医、日本化学療法学会抗菌化学療法認定医
- 評議員：日本臨床分子形態学会
- 円形脱毛症診療ガイドライン策定委員

学術集会（演題数：17）

プログラム

学術集会長：玉上　麻美（大阪公立大学大学院看護学研究科　先進ケア科学領域・ウィメンズヘルスケア科学　教授）

※〇が発表者

第１群【６題】13：45　～　14：35

座長：門雀 由加子 先生（ベルランド看護助産大学校　助産学科長）

１．妊娠中のつわりによる味覚と食嗜好の変化

〇井上 七海[1)]，大木 郁実[1)]，岡本 睦月[1)]，花房 香央里[1)]，濱田 恵鈴華[1)]，山本 倫果[1)]，江﨑 薫世[2)]，屋敷 久美[2)]

1）聖バルナバ助産師学院 106 回生，2）聖バルナバ助産師学院教員

２．Ａ病院における就労妊婦の母性健康管理指導事項連絡カードの周知と使用状況

〇高亀 瑞季[1)]，國友 菜花[1)]，西川 詩帆[1)]，田路 真紀亜[1)]，濵池 祥子[1)]，文 智和[1)]，皆川 いろり[1)]，前田 寿美[2)]，屋敷 久美[2)]

1）聖バルナバ助産師学院 106 回生，2）聖バルナバ助産師学院教員

３．助産院における真性陥没乳頭をもつ妊婦への支援実態
―熟練助産師による妊娠期のケアに焦点をあてて―

〇井上 美和[1)]，竹内 佳寿子[2)]

1）園田学園大学　人間健康学部人間看護学科，2）姫路大学　看護学部看護学科

４．ERAS 導入による帝王切開患者の回復状況の変化とスタッフの運用課題の検討

〇松本 和恵[1)]，山下 愛[1)]，糸井 加奈子[1)]，札場 恵[2)]，福元 由香[1)]，松本 佳也[2)]

1）市立岸和田市民病院　２階東病棟，2）市立岸和田市民病院　産婦人科

５．当院での産後 2 か月以降の母乳率の現状調査

〇竹田 昌美，定山 奈津子，土居 暁，西 秋津，谷口 武

医療法人定生会　谷口病院

６．あわあわ沐浴と保湿スキンケアの実践に対する助産師の意識調査と今後の展望

〇石田 美佳子[1)]，大本 真祐子[1)]，押谷 のどか[1)]，島田 繭子[1)]，田中 裕子[1)]，原田 沙弥可[1)]，吉福 かんな[1)]，佐藤 貴子[1)]

1）医療法人　恵仁会　田中病院

第２群【５題】14：45　～　15：25

座長：村上 聖女 先生（大阪大学医学部附属病院　総合周産期母子医療センター　師長）

７．我が国における産褥精神病予防のための産婦への効果的な「声掛け」の検討
～AI 解析ツール「NoteBookLM」の抽出・要約機能を用いた分析の試み（研究報告）～
〇松田 葉子，高橋 建次
大阪青山大学看護学部看護学科（精神看護学）

８．無痛分娩の出産満足度と影響因子
〇渡邉 香音[1)]，真浦 桃香[1)]，光田 志歩[1)]，森 久美[1)]，門野 愛美[1)]，吉村 結衣[1)]，屋敷 久美[2)]
1）聖バルナバ助産師学院 106 回生，2）聖バルナバ助産師学院教員

９．分娩時多量出血の発生要因の検討
〇宮下 雅子[1)]，岡田 公子[1)]，中川 さくらこ[1)]，蔵内 美香[1)]
1）医療法人宝生会　PL 病院

10. 和痛分娩で主体的に出産に関与できた女性の体験
〇竹内 佳寿子[1)]，井上 美和[2)]
1）姫路大学　看護学部看護学科，2）園田学園大学　人間健康学部人間看護学科

11. 吸引分娩により出産した女性が主体的に関与したととらえられる出産体験
〇浅尾 美保[1)]，新田 正美[1)]，松浦 祥子[1)]，大西 幸恵[1)]，岩田 塔子[1)2)]，増谷 円[1)]，関 暖菜[1)]，
丸本 紗奈江[1)3)]，井上 美和[4)]，竹内 佳寿子[5)]
1）公益財団法人　聖バルナバ病院，2）めぐみ助産院，3）大阪歯科大学　看護学部，
4）園田学園大学　人間健康学部人間看護学科，5）姫路大学　看護学部看護学科

第３群【６題】15：35　～　16：25

座長：徳永 明美 先生（小阪産病院　看護部長）

12. 看護職者が行う家庭内性教育の実態

〇西田 真穂[1)]，中根 祥子[2)]，常慶 友有子[3)]
1、2、3）石井記念愛染園附属愛染橋病院

13. A病院の看護職員に対するHPVワクチンに関する情報提供の検討

〇佐藤 夕葵[1)]，中根 祥子[2)]，常慶 友有子[3)]
1)2)3)石井記愛染園附属　愛染橋病院

14. 男性の月経前症候群の症状に対する知識と女性の社会進出に対する意識との関連

〇伊東 夢七[1)]，岡山 このは[1)]，黒木 結友[1)]，田中 理菜[1)]，宮内 夏鈴[1)]，村田 紋子[2)]，
門雀 由加子[2)]，岩原 昭彦[3)]
1）ベルランド看護助産大学校　助産学科33回生，2）ベルランド看護助産大学校　助産学科，
3）京都女子大学心理共生学部

15. 産科病棟スタッフを対象とした学生指導支援の実践とその効果

〇阿部 久美[1)]
1）公立大学法人　大阪公立大学医学部附属病院

16. 大阪府助産師会におけるMy助産師体制の取り組みの成果と課題

〇渡邊 和香[1)]，村島 和代[2)]，日隈 ふみ子[3)]，緒方 敏子[4)]，平山 三千代[5)]
1）2）3）4）5）大阪府助産師会　My助産師体制委員会

17. 親子・家庭・地域社会の懸け橋「おひさまサンサン広場」の活動報告

〇神田 淳子[1)]，磯福 久仁子[2)]，宮川 祐三子[3)]，平山 三千代
1）2）3）4）一般社団法人　大阪府助産師会

１群

１．妊娠中のつわりによる味覚と食嗜好の変化

〇井上 七海(Nanami Inoue)[1)], 大木 郁実(Ikumi Oki)[1)], 岡本 睦月(Mutsuki Okamoto)[1)],
花房 香央里(Kaori Hanahusa)[1)], 濱田 恵鈴華(Erena Hamada)[1)], 山本 倫果(Rinka Yamamoto)[1)],
江﨑 薫世(Kaoruyo Ezaki)[2)], 屋敷 久美(Yashiki Hisami)[2)]
1)聖バルナバ助産師学院 106 回生, 2)聖バルナバ助産師学院教員

【目的】妊娠による味覚・嗅覚の変化に伴う食嗜好の現状を明らかにし、妊婦の保健指導に活かす知見を得たいと考えた。
【方法】妊娠 30 週以降の妊婦を対象とし、無記名記述式質問用紙にて妊娠前後における味覚・嗅覚の変化、食嗜好の変化について調査を行った。
【結果】有効回答 51 人中 95％の妊婦がつわりを自覚しており、妊娠前は甘味、妊娠後は酸味が最も好まれていた。妊娠により好きになった食べ物は「果実類＜柑橘系＞」が多く、嫌いになったのは「肉類」や「調味料及び香辛料の＜出汁類＞」が多かった。好きになったにおいは「柑橘系」が多く、嫌いになったにおいは「腐敗臭＜生ごみ＞」、「食品のにおい＜ごはんの炊けたにおい＞」、「科学的なにおい＜洗剤・シャンプー＞」が多かった。
【考察】妊娠期は、エストロゲン増加により不快と感じるアンモニアの感受性が増加することで、味覚・嗅覚に敏感になると考える。妊娠初期からの保健指導で摂取しやすい食品を伝えるなど、妊婦の予防行動に活かせると考える。
【keywords】つわり、妊娠期間、保健指導、味覚、嗜好

２．Ａ病院における就労妊婦の母性健康管理指導事項連絡カードの周知と使用状況

〇高亀 瑞季(Mizuki Kougame)[1)], 國友 菜花(Nanoka Kunitomo)[1)], 西川 詩帆(Shiho Nishikawa)[1)],
田路 真紀亜(Makia Taji)[1)], 濵池 祥子(Shoko Hamaike)[1)], 文 智和(Chiwa Bun)[1)],
皆川 いろり(Irori Minagawa)[1)], 前田 寿美(Sumi Maeda)[2)], 屋敷 久美(Hisami Yashiki)[2)]
1) 聖バルナバ助産師学院 106 回生, 2) 聖バルナバ助産師学院教員

【目的】母健連絡カードの認知・活用状況・ニーズを明らかにすることで、また就労妊婦が安心して就労を継続していくために必要な、助産師としての必要な支援について考える。
【方法】就労状況、母健連絡カードの認知・活用状況、マイナートラブル及びニーズなどについて、Web アンケートフォームを用いて調査し、単純集計を行った。
【結果】妊婦の 9 割がマイナートラブルを抱えながら就労している。母健連絡カードの認知度は約 45％で、活用した妊婦は、就労を継続することができていた。就労継続のために仕事量の調整や休暇の確保などのニーズが高かった。
【考察】多くの妊婦がマイナートラブルを抱えながら就労しており、就労妊婦が安心して働けるように医療者が母健カードの情報提供を続けていくことが大切である。また企業側にむけた啓蒙活動も必要であると考える。
【Keywords】母性健康管理指導事項連絡カード、就労妊婦、マイナートラブル

３．助産院における真性陥没乳頭をもつ妊婦への支援実態
―熟練助産師による妊娠期のケアに焦点をあてて―

〇井上 美和(Miwa Inoue)[1)], 竹内 佳寿子(Kazuko Takeuchi)[2)]
1）園田学園大学　人間健康学部人間看護学科, 2）姫路大学　看護学部看護学科

【目的】熟練助産師が多く勤務する助産院における真性陥没乳頭をもつ妊婦への支援実態を明らかにすることを目的とした。
【方法】日本助産師会に所属する助産院に真性陥没乳頭をもつ妊婦への支援についてWebアンケートを実施した。同意を得た回答をExcelで単純集計した。本研究は、A大学倫理委員会の承認を得て実施した。
【結果】妊娠期に乳頭・乳房の観察を行う助産師は91％で、観察開始時期は妊娠10～27週が多く、観察内容は乳頭の突出状態、乳輪部の柔軟性、乳頭の硬度などであった。妊娠中にケアを行う助産師は86％で、乳頭マッサージ、乳頭吸引器や乳頭保護器の使用など多様な方法が実施されていた。ケア実施者は母親本人が92％で、頻度は毎日が71％を占めた。
【考察】陥没乳頭への妊娠中からの支援の必要性を感じている助産師は92％であり、多くの助産師が妊娠期からの観察とケアが母乳育児の成立に重要であると認識していた。

４．ERAS導入による帝王切開患者の回復状況の変化とスタッフの運用課題の検討

〇松本 和恵(Kazue Matsumoto)[1)], 山下 愛(Ai Yamashita)[1)], 糸井 加奈子(Kanako Itoi)[1)],
札場 恵(Megumi Fudaba)[2)], 福元 由香(Yuka Fukumoto)[1)], 松本 佳也(Yoshinari Matsumoto)[2)]
1）市立岸和田市民病院　２階東病棟, 2）市立岸和田市民病院　産婦人科

【目的】帝王切開は術後の回復を促すと同時に育児技術を習得し退院することが目標となる。術後早期回復プログラム（ERAS）導入による患者の回復状況およびスタッフの運用上の課題を明らかにすることを目的とした。
【方法】ERAS導入前6名、導入後12名の患者を対象に、術後回復スコア（ObsQoR-10）、離床・母児同室開始時期、鎮痛剤使用状況を比較した。また、スタッフへのアンケート調査より課題や改善提案を収集した。
【結果】ObsQoR-10スコアは導入後に改善したが、離床や母児同室開始時期に有意な変化がなかった。スタッフからは患者の回復が早くなったと感じる一方、緊急帝王切開時の薬剤依頼の煩雑さ、情報共有不足などの課題が挙げられた。
【考察】ERAS導入は患者のQOL向上に寄与する可能性があるが、母児同室開始時期などは改善がみられなかった。スタッフの声を反映したプロトコル整備や情報共有が今後の課題である。

５．当院での産後２か月以降の母乳率の現状調査

〇竹田 昌美(Masami Takeda), 定山 奈津子(Natsuko Sadayama), 土居 暁(Aki Doi),
西 秋津(Akitsu Nishi), 谷口 武(Takeshi Taniguchi)
医療法人定生会　谷口病院

【目的】
産科では、1 か月健診で定期受診が終わり、その後の授乳方法の把握が困難となる。
産後 2 か月以降の授乳状況を調査し、母乳率の変化や今後の支援の在り方について検討した。
【方法】
当院で出生した児の予防接種で来院した母親へ「1 か月健診までと 2～5 か月時」の授乳方法及び居住先等を問うアンケートを実施。アンケートについては個人が特定できないように配慮した。
居住先を「自宅から自宅（以下 A 群）」「実家から自宅（以下 B 群）」と二群化し、母乳率の比較を行った。
【結果】
母乳率は、1 か月健診時で A 群 46％、B 群 79％、2～5 か月時で A 群 45％、B 群 74％であり、
1 か月健診時と 2～5 か月時とで母乳率に大きな変化はなかったが、B 群の方が、母乳率は高かった。
【考察】
母乳育児確立には、授乳に集中できる環境・周囲の理解が必要で、その点で実家はこの条件が満たされている場となっていると考えられた。
【Keywords】
授乳方法、母乳率

６．あわあわ沐浴と保湿スキンケアの実践に対する助産師の意識調査と今後の展望

〇石田 美佳子(Mikako Ishida)[1], 大本 真祐子(Mayuko Omoto)[1], 押谷 のどか(Nodoka Oshitani)[1],
島田 繭子(Mayuko Shimada)[1], 田中 裕子(Yuko Tanaka)[1], 原田 沙弥可(Sayaka Harada)[1],
吉福 かんな(Kanna Yoshifuku)[1], 佐藤 貴子(Takako Sato)[1]
1) 医療法人　恵仁会　田中病院

【目的】当院の「あわあわ沐浴」と「保湿スキンケア」の現状について報告、評価し、今後の新生児の清潔ケアの展望を検討する
【方法】新生児の清潔ケアを実施している助産師 14 名に無記名自記式質問紙調査を実施。集めたデータは単純集計を行い、記述内容はコード化し KJ 法におけるグループ分けの手法を使いカテゴリー化して分析した。
【結果】以前に当院や他施設で経験した従来の清潔ケアよりシャワー使用のアウトバスと保湿ケアにより、入院中および 1 か月健診の新生児の皮膚状態が良好であると全員が回答した。あわあわ沐浴に使用する 3 種類マットについても 6 項目で評価し、今後の使用に適性が明らかになった。
【考察】当院の現在の清潔ケアの方法について助産師は皮膚状態に良いと満足する一方で、手技によっては体温低下の心配があること、使用する洗浄剤、保湿剤、マットについて今後もより良い物を検討し、保護者にこのケアを継続して欲しいと願っていることがうかがえた。

２群

７．我が国における産褥精神病予防のための産婦への効果的な「声掛け」の検討
～AI 解析ツール「NoteBookLM」の抽出・要約機能を用いた分析の試み（研究報告）～

〇松田 葉子(Yoko Matsuda), 高橋 建次(Kenji Takahashi)
大阪青山大学看護学部看護学科（精神看護学）

【目的】我が国では産後うつ病による自殺率が増加する中、母親のメンタルヘルス対策は急務の課題である。精神的ケアの基本は声掛けや寄り添いを中心とする支援であり、適切な声掛けは自己肯定感を高める効果が報告されている。特に分娩時の助産師・看護師の関わりは声掛けが大部分を占め、その影響は大きい。本研究では医療従事者による産婦への効果的な声掛けを過去の文献から抽出した。
【方法】GiNi Articles、医学中央雑誌 Web、J-stage を用い（1995～2025 年）、7 件を解析対象とした。また Notebook LM を併用し網羅的に声掛けの抽出を行った。
【結果】効果的な声掛けパターンは「励ましと承認」「見通しと情報提供」「共感と寄り添い」「行動の誘導」であり、非効果的な物は「不十分な情報」「身体反応の否定」「無理な指示」「文化的障壁」であった。
【考察】効果的・非効果的な声掛けの違いは、共感と理解、情報提供の質とタイミング、信頼関係の構築に関連している事が示唆された。

８．無痛分娩の出産満足度と影響因子

〇渡邉 香音(Kanon Watanabe)[1] 真浦 桃香(Momoka Maura)[1], 光田 志歩(Shiho Mitsuda)[1],
森 久美(Hisami Mori)[1], 門野 愛美(Ami Monno)[1], 吉村 結衣(Yui Yoshimura)[1] ,
屋敷久美(Kumi Yashiki) [2]
1）聖バルナバ助産師学院 106 回生, 2）聖バルナバ助産師学院教員

【目的】無痛分娩による出産満足度への影響を検討するために、自然分娩と無痛分娩の満足度を比較し、満足度を高めるために助産師としての有効な関わりについて示唆を得る。
【方法】A 病院の産婦 54 名を対象に質問紙調査を実施した。出産満足度については、出産体験自己評価尺度を用いて評価し、自然分娩群と無痛分娩群で比較した。助産師の対応に関する自由記述については KJ 法を用いて分析した。
【結果】出産満足度 4 つの下位尺度における両群の有意差は認めなかったが、出産満足度尺度 35 項目中「痛みが少なかった」という項目のみ無痛分娩群で有意に高かった。助産師に求める対応は「無痛分娩のメリット・デメリットの説明」が最も高かった。
【考察】無痛分娩の出産満足度向上には、助産師による無痛分娩の十分な情報提供に加え、麻酔開始時期の相談・自己決定など、産婦の希望に寄り添った支援が求められる。
【Key word】無痛分娩、自然分娩、出産満足度

９．分娩時多量出血の発生要因の検討

〇宮下 雅子(Miyako Miyashita)[1)], 岡田 公子(Kimiko Okada)[1)], 中川 さくらこ(Sakurako Nakagawa)[1)], 蔵内 美香(Mika Kurauchi)[1)]
1）医療法人宝生会　PL 病院

【目的】分娩を取り巻く社会的背景と当院のデータから分析し、分娩時多量出血の増加要因を考える。
【方法】助産録より情報収集を行い、分娩方法や出血量など分娩時多量出血の要因となる項目を抽出、2008 年と 2024 年のデータを比較し実態調査を行った。
【結果】第一子出産年齢は 2024 年 31.0 歳と高止まるが、分娩時多量出血は大きく増加。自然分娩でリスクのない群が最も多いという意外な結果となる。
【考察】自然分娩を目指し可能な限り医療処置は行わないことが当院の特徴だ。産婦の高齢化だけでなく、分娩に対する意識や姿勢も変化しつつある。産婦に分娩時の必要な知識について説明し、産婦の疲労が最小限で安全に分娩できるよう常に伝えていく必要がある。

10. 和痛分娩で主体的に出産に関与できた女性の体験

〇竹内 佳寿子(Kazuko Takeuchi)[1)], 井上 美和(Miwa Inoue)[2)]
1）姫路大学　看護学部看護学科, 2）園田学園大学　人間健康学部人間看護学科

【目的】和痛分娩をした女性の語りを多面的に分析し、主体的に出産に関与した体験を明らかにすることを目的とした。
【方法】和痛分娩予定の妊婦に、妊娠期・産褥入院中・産後 1 か月の 3 時点で半構造化面接を行い、語りをエスノグラフィーの視点から質的帰納的に分析した。妊娠期から出産後の出産のとらえの語りを時期ごとに整理し、主体的関与の体験と出産体験のとらえ方を抽出・分析した。本研究は、研究倫理審査の承認を得て実施した。
【結果】同意を得た 2 名のうち、初産婦は和痛導入の時期に不満を示し、経産婦は前回同様満足できた体験であった。共通した主体的に関与した体験は、自身の感覚で分娩の進行を把握しコントロール感を得た体験、想定どおりで自分なりに対処できた体験であった。
【考察】看護者は、和痛による身体感覚の変化を踏まえ、女性が自らの感覚を手がかりに進行を把握でき、自分らしく出産できたと感じられるような支援が求められる。

11. 吸引分娩により出産した女性が主体的に関与したととらえられる出産体験

〇浅尾 美保(Miho Asao)[1], 新田 正美(Masami Nitta)[1], 松浦 祥子(Sachiko Matsuura)[1],
大西 幸恵(Sachie Onishi)[1], 岩田 塔子(Toko Iwata)[1)2], 増谷 円(Madoka Masutani)[1],
関 暖菜(Haruna Seki)[1], 丸本 紗奈江(Sanae Marumoto)[1)3], 井上 美和(Miwa Inoue)[4],
竹内 佳寿子(Kazuko Takeuchi)[5]
1) 公益財団法人　聖バルナバ病院, 2) めぐみ助産院, 3) 大阪歯科大学　看護学部,
4) 園田学園大学　人間健康学部人間看護学科, 5) 姫路大学　看護学部看護学科

【目的】吸引分娩により出産した女性が主体的に出産に関与した体験を明らかにすることを目的とした。
【方法】同意を得て半構造化面接を行った後、エスノグラフィーを参考に質的記述的分析を行い、女性が主体的に出産に関与したととらえられる体験を抽出した。倫理委員会の承認を得て実施した。
【結果】吸引分娩で出産した 2 名を分析対象とした。共通して女性が主体的に出産に関与したととらえられた体験は、妊娠や出産を前向きにとらえた体験、自発的に情報収集し分娩様式や過ごし方などを決定した体験、医療介入の説明に納得し自身でも必要と考えた体験、分娩や児の様子を様々な情報から知ろうとした体験などであった。また、支援者の力を活用した体験、陣痛中能動的に過ごした体験などが個別に抽出された。
【考察】看護職は、女性が妊娠中から自己決定し行動できるよう支援するとともに、吸引分娩などの医療介入を納得して受けられるよう支援する必要がある。

３群

12. 看護職者が行う家庭内性教育の実態

〇西田 真穂(Maho Nishida)[1], 中根 祥子(Sachiko Nakane)[2], 常慶 友有子(Yuko Jyokei)[3]
1、2、3) 石井記念愛染園附属愛染橋病院

【目的】学校での性教育には内容に制限があり、家庭内での性教育の意義が高まっている。そこで本研究は、家庭内性教育の普及に向けた基盤とするため、看護職者が自ら行う家庭内性教育の実態を明らかにすることを目的とした。
【方法】家庭内性教育の認識、実施状況、指導内容の 12 項目を表記した調査票を作成した。A 病院の看護職員に配布し、166 部回収した。データは単純集計し、自由記載は内容を類別して分析した。
【結果】家庭内性教育の必要性については「学校での性教育が不十分なため必要」との意見と「学校で学べるため必要ない」との意見があり相反する結果が得られた。家庭内性教育の実施率は先行研究より高く、実施の動機は「子どもからの質問時」が最多であった。
【考察】看護職者が性教育を実施する際には事前に保護者へ実施日時や内容を共有し、理解を得ることが重要である。また、保護者対象の性教育の機会を設けることも今後の課題である。

13. A病院の看護職員に対する HPV ワクチンに関する情報提供の検討

〇佐藤 夕葵(Yuki Sato)[1], 中根 祥子(Sachiko Nakane)[2], 常慶 友有子(Yuko Jokei)[3]
1)2)3)石井記愛染園附属　愛染橋病院

【目的】HPV ワクチンの接種対象者や保護者に対して正しい知識を基に情報提供を行うために、A 病院の看護職員における HPV ワクチンに関する情報提供の現状と内容を明らかにすることを目的とした。
【方法】A 病院の看護職員 242 名を対象に、厚生労働省の調査項目を参考に作成した子宮頸がんおよび HPV ワクチンに関する質問紙調査を実施した。得られたデータは単純集計を行った。さらに、年代別に分類し比較検討を行った。
【結果】看護職員の約半数は HPV ワクチン有効と考えていたが、副反応への懸念から接種には消極的な傾向がみられた。年代別の比較では「ワクチン接種の積極的勧奨再開」「キャッチアップ接種」「性的接触後のワクチン接種は意味がない」にかんする設問で有意差が認められた（$p<0.05$）。
【考察】看護職員に対しては、ワクチンの副反応や相談窓口に関する情報に加え、性的接触後におけるワクチンの有効性についても正確に情報提供することが重要である。

14. 男性の月経前症候群の症状に対する知識と女性の社会進出に対する意識との関連

〇伊東 夢七(Yuna Ito)[1], 岡山 このは(Konoha Okayama)[1], 黒木 結友(Yu Kuroki)[1],
田中 理菜(Rina Tanaka)[1], 宮内 夏鈴(Karin Miyauti)[1], 村田 紋子(Ayako Murata)[2],
門雀 由加子(Yukako Monjaku)[2], 岩原 昭彦(Akihiko Iwahara)[3]
1) ベルランド看護助産大学校　助産学科 33 回生, 2) ベルランド看護助産大学校　助産学科,
3) 京都女子大学心理共生学部

【目的】男性の月経前症候群（以下、PMS とする）の症状に対する知識と女性の社会進出に対する意識との関連を明らかにする。
【方法】クロスマーケティング社にモニターとして登録し、正社員として就労している男性 358 名を対象に web による自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、個人属性、PMS の症状の知識、女性管理職に対する態度尺度であった。
【結果】PMS に対する知識量に基づいて対象者を低群、中群、高群の 3 群に分割した。「職場の男女平等性」と「管理職としての女性の適性」を従属変数、PMS 知識群を独立変数とした分散分析を実施したところ、低群が中群・高群よりも得点が低くなることが明らかとなった。
【考察】健康経営を推進するうえで、PMS に関する正しい知識の普及は、女性への理解を深め、職場の男女平等や女性の管理職登用を促進する上で重要であることが示唆された。

15. 産科病棟スタッフを対象とした学生指導支援の実践とその効果

〇阿部 久美(Kumi Abe)[1]
１）公立大学法人　大阪公立大学医学部附属病院

【目的】周産期領域の臨地実習において、産科病棟スタッフが学生指導に抱える課題や困難を把握し、それらを支援によって解決・軽減することで、スタッフの意識変容と指導の質向上を促す。
【方法】産科病棟スタッフに対し、実習開始前および複数グループの指導終了後に無記名アンケートを実施。得られた結果をもとに、支援体制の整備や勉強会を行い、指導意識の変化を調査した。
【結果】スタッフは学生担当者としての役割を再認識し、経験を伝える意識が芽生えた。振り返りの時間確保や支援によって指導への不安が軽減され、学生の学びが深まり、指導が自身の看護を見直す契機となった。
【考察】スタッフが抱える課題に対して支援を工夫することで、学生の気づきを促す指導が可能となり、結果としてスタッフの意識が変容し、指導の質の向上につながった。今後も実習支援の取組みを継続に見直し、現場での指導が円滑に行える体制づくりが求められる。

16. 大阪府助産師会におけるMy助産師体制の取り組みの成果と課題

〇渡邊 和香(Yasuko Watanabe)[1], 村島 和代(Kazuyo Murashima)[2], 日隈 ふみ子(Fumiko Hinokuma)[3],
緒方 敏子(Toshiko Ogata)[4], 平山 三千代(Michiyo Hirayama)[5]
1) 2) 3) 4) 5) 大阪府助産師会　My助産師体制委員会

【目的】
大阪府助産師会（本会）で「My助産師体制委員会」（委員会）として取り組んだ4年間の実績から今後の活動の方向性を見出す。
【方法】
本会助産師、行政、妊産婦の3対象への活動から成果と今後の課題をまとめた。
【結果】
本会助産師へ、①常任理事会で「My助産師とは、妊婦から選ばれた
一人の助産師（チーム）が妊娠期から育児期まで継続して伴走する助産師」と共通認識を持つため1年間審議。②My助産師の理解と周知を目的に研修会を開催。③チラシ「My助産師とは」を作成し全会員へ配布。④本会会報誌で活動の広報。
行政へ、毎年の予算要求の要望書でMy助産師の理解と継続した助産師活動の実践を要望。
妊産婦へ、「チラシ」を作成し各市町村イベント等で配布中。
【考察】
現時点は、本会会員の認識度、行政への働きかけ、妊産婦の認識度から周知が行き届き始めた時期と考える。今後さらにMy助産師として継続ケアの体制を推進する。
【key words】大阪府助産師会、My助産師、選ばれる助産師、継続ケア、行政と連携

17. 親子・家庭・地域社会の懸け橋「おひさまサンサン広場」の活動報告

〇神田 淳子(Junko Kanda)[1], 磯福 久仁子(Kuniko Isofuku)[2], 宮川 祐三子(Yumiko Miyagawa)[3],
平山 三千代(Michiyo Hirayama) [4]
1) 2) 3) 4) 一般社団法人　大阪府助産師会

【目的】児童福祉法に基づく市町村事業として始まった地域子育て支援拠点事業「おひさまサンサン広場」に助産師、保育士等で運営した効果を検証する。
【方法】令和5年、6年の2年間の地域子育て支援拠点事業4つの基本事業項目に沿って事業内容を分析した。
【結果】①産後2～5か月を対象とした講座参加を契機に新規利用者が約25％増加。②助産師が実施する身体計測日には育児相談が2.5倍多く、利用者は13％増加。③子育てに困難さを感じている利用者を保健センターへつなぎ、療育支援を受けた事例が1例。助産師の養育訪問から広場で継続支援をしている事例が3例。④プレパパ講座を年2回から12回に増やした結果、父親の利用が増加。
【考察】妊娠中や産後早期に参加できる講座は早期からの広場利用につながり、育児の孤立化を予防していると考える。今後は子育て支援に関わる多職種と連携し、地域の子育て支援機能の充実を図ることが課題である。
【key words】地域子育て支援拠点事業、親子の交流、地域連携、子育て親子の支援、健やかな成長

MEMO

MEMO

健康にアイデアを
meiji

大切な赤ちゃんへ

積み重ねた100年間

母乳をお手本に

DHA・ARA
ビフィズス菌
B. bifidum OLB6378
＋
フラクトオリゴ糖

粉末タイプ

キューブタイプ

液体タイプ

※1 インテージSRI＋ 乳児用ミルク市場2024年4月～2025年3月累計販売金額
※「明治ほほえみ らくらくミルク」には、ビフィズス菌 B.bifidum OLB6378　は配合していません。

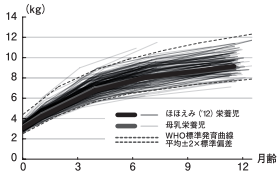
安心・安全の
No.1[※1]ブランド

明治ほほえみ®シリーズ

母乳をお手本に進化をつづけ、赤ちゃんの確かな発育を目指しました。

明治のこだわり 20万人以上の赤ちゃんの発育調査

50年以上にわたり、20万人以上の赤ちゃんの発育を調査



明治のこだわり 6,000人以上の母乳の組成調査

日本全国6,000人以上のママから提供いただいた母乳の成分組成を調査

●3回の調査延べ人数　1回目　1979年（1,700人）、2回目 1998～1999年（4,243人）、3回目 2012～2014年（405人）

もしもに備えよう! 備蓄にも適した「明治ほほえみ らくらくミルク」

母乳をお手本とした「明治ほほえみ」と同等の栄養設計

内容量240ml

災害備蓄用途に適した
安全性の高いスチール缶

常温での長期保存が可能
未開封で製造から18ヵ月

保存料不使用

明治ほほえみ　検索

https://www.meiji.co.jp/baby/hohoemi/

使用方法

ミルク作り・温めなし（常温）で、哺乳瓶に移してそのまま飲める!

1. 手を清潔にする
2. よく振る
3. 清潔な哺乳瓶に移しかえる

製造時の高温殺菌により液色が茶色くなっています。

株式会社 明治